

“覆水盆に返す”教育的表現活動 ―言葉に頼らない表現環境作り―

福岡 龍太

Educational environment for "returning spilled milk"
―With the expression environment that a supporter doesn't depend on a word ―

Tatsuhiko Fukuoka

はじめに

近年特に、学習指導要領の表現教育の分野において、「主体的な学び」等の児童・生徒の自発的な意思表現を尊重する動きが活発化している¹。筆者が理解する「主体的な学び」とは、指導者の計画に基づいた内容や指導者の誘導による学習の実施のみを指しているわけではなく、明治から大正にかけて展開があった「恩物」の使用法から解放された「遊び」²、すなわち保育のいとなみの中心となる幼稚園教育の基本³にもなっている「幼児の自発的な活動としての遊び」と同一線上にあるものとして捉える。しかし、子どもが発達段階の早期に“遊び”と“学び”を対極のものとしてとらえ、“学び”を優先させてしまえば、恐らく「自発的な遊び」の影は薄らぐ。もし健全な子どもを学びに導くことが指導者を含めた大人の喜びであるならば、早期教育が盛んになるのは当然だろう。例えば、幼児教育における英語に対する認識を見ると、実に7割の子どもが小学校就学前から有償の英語教育を行っているという結果がある⁴。そして幼児期に英語が必要であると答えた母親は7割を超える。また、その傾向はすでに2007年には明らかとなっており⁵、保護者の英語教育に対する熱意は日を増すごとに高まっている。その一方で、英語を理解できない園児が、保護者の望む成果を出せないという報告も多い⁶。できる限り遊びの中で学びを提供する指導者側の努力は随所に見受けられるが、実際には得手不得手を幼少期より生んでしまっていることも、母国語が曖昧になってしまうことも、結果的に「勉強ができない子」を量産しているのではないかとの指摘がある⁷。

幼児期の早期教育が盛んな今、“遊び”の本質が変わってきたのではないか。子どもから遊びを早々に取り上げてしまえば、学びを円の中心に置き、円内にいる「まじめに学びへ取り組む子ども」(①)と、円外にいる「学びを拒絶する子ども」(②)、「なかなか遊びをやめない子ども」(③)とに区別することへつながる。

ここで筆者が気になることは、②と③に該当する子どもである。②が遊びに熱中しているのならばさほど問題視はしないが、遊びにも興味を持たず、学びを拒絶するのには何か原因があり、そのうち反発

に転じるのではないかと推測してしまう。もし反発してしまえば、大人は総じて「気になる子」と言うような表現を用いて注視したくなるだろう。また、③も、熱中しすぎると同様である。早くから社会に適応できる子どもが増える一方で、近年「気になる子」の中には何らかの障碍（しょうがい）を持っているのではないかと疑われる子も多い。障碍者支援が活発な昨今、筆者は数年前よりこの教育環境や社会に耐えられず「気になる子」から「気にするだけではいけない子」すなわち、環境に反発しすぎて罪を犯してしまった触法障碍児がいることを知った。

I 問題意識

2016年12月、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会では、幾度も審議をして児童生徒の「学びに向かう力」「主体性」を強化する目的で、アクティブ・ラーニングの定着を今般の教育現場に求めた。「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」と3視点の提示により質の高い学びを実現しようとしている⁸。この3視点の取り組みは普通校にとどまらず、特別支援学校にも同様に周知され、実践報告として発表されている。「(アクティブ・ラーニング) 実現のために指導者がすべきことは、特定の指導方法、学校教育における指導者の意図性などを否定することなく、教えることにしっかりと関わり、授業の工夫・改善を重ねていくことだ⁹」と述べた知的教育部4年生の児童を担当する特別支援学校の教員の授業では、ゲームを題材にした自発性を引き出す学習活動に取り組んでいる。しりとり遊びで出た言葉をカードにして、ビンゴゲームに発展させる内容は、それぞれのルールを理解しながら積極的な交流を促しつつ、勝敗を意識しながらも他者を尊重することで、アクティブ・ラーニングの3視点を具現化している。また、実践結果として満足できる学習効果が得られたと報告しながらも、「更なる実践を繰り返すことにより児童が考える授業にも焦点を当てたい」と締めくくっている¹⁰。児童が理解しやすいゲームを導入に用いることで、確実に児童を授業へ引き込む期待が高まり、また得られる効果も大きいと予測される。この実践におけるアクティブ・ラーニングの3視点を満足させるためのポイントは、ゲームの魅力を提示することで子どもの自発性を引き出そうとしているところである。しかし、そもそも授業とは始まる時刻と授業時間が決まっており、教員主導で授業計画に沿って進められる。授業に参加する児童・生徒が授業開始と同時に活動できることは素晴らしいが、果たしてそれは自発的なのか。教員が遊びを始め“させて”、それを授業時間内で完結“させている”と言えるのではないか。

筆者の問題意識は、子どもの主体性を引き出す前に、指導者を中心とした大人がもっと理解すべきことはないのか、ということだ。そこで筆者はこの問題を解消するために、「気にするだけではいけない触法障碍児」との関わりの中から“すべきこと”を見つけることにした。

II 目的と本実践を行う価値

先述した特別支援学校でアクティブ・ラーニングを実践している教員は、主体的な学びへ児童を誘うためにどのような言葉がけをしたのだろうか。教員はおそらく、この言葉がけをきっかけにそこから対話的な学びへ移行し、それを深い学びへとつなげていくのだろう。簡単な言葉がけから深い学びにつなげる代表的な活動と言えば、美術館等で行われている「対話型鑑賞」が挙げられる。美術館が作品の解説を一方的に鑑賞者へ提供するのではなく、作品に関するわずかなきっかけを提示しながら、作品を見て感じたこと、気づいたこと、疑問点などについて話し合う。このような場を設けることで、視覚的な情報を介して個々の感情は交錯しながら広がりを見せる。これが対話型鑑賞の魅力である。小・中学校

での実践事例から対話型鑑賞の学びの誘因を分析している鈴木有紀によると、これからの時代にますます求められる能力―主体的に考える力、自ら問いを見出す力、正解のない問いに挑む力、人と対話を通して学ぶ力など―を獲得するために、対話型鑑賞への関心は小・中学校だけでなく、高校や大学、社会人向けにも静かに広がりを見せているようだ¹¹。

対話による学びが重視される今、感情を発話に変換することに慣れていない、もしくは苦手とする人は、この流れに乗れず置き去りになってしまう。言い方は悪いが、「できる子」と「できない子」を区別してしまう教育環境が言葉に頼っているからだと仮定すれば、あまり言葉による交流を得意としない障害児が、思い通りにならずいらだつことは理解しやすい。本実践活動の目的は、言葉に頼らない生活へ触法障害児をいざない、そこで主体性を引き出すきっかけを見つけることである。まず筆者がやるべきことは、安心できる生活環境を、人間関係の歪みにより心を閉ざした彼らと共に模索することだ。もし彼らが自発的な遊びを生み、いつしかそれが主体的な学びから深い学びへとつながるアクティブ・ラーニングを獲得したならば、その方策を広く学びの環境へ応用できる可能性は高い。筆者はこの可能性を本実践の価値とした。

筆者は自身の障害者芸術活動研究のすべてにおいて「障害」と表記する。その理由は戦前まで使われていた表記を今につなげることで、時代を超えた障害者との関わりに一貫性を持ちたいと願うためだ。その一方で、表記にこだわったところで諸問題の根本的な解決にはならないという関係者の意見もあるが、時代の移り変わりに順応した支援をしながらも、基本軸が揺らぐことがないように筆者はあえてこの表記にこだわる。なお本実践報告では対象者の実名公表の許諾は得ているが、筆者の判断で非公開とする。

Ⅲ 実践方法

1. 社会復帰を支援する社会福祉施設について

愛知県名古屋市熱田区に本拠を置く「くらし応援ネットワーク（代表：岡部昭子氏）」（以下「くらし」）には、世代も障碍の特性も異なった多くの障害者が生活をしている。この施設では、目的別に支援をカテゴライズしているが、その中でも極めて稀な特徴を持った支援部門が存在する。そこは、犯罪歴のある未成年の社会復帰を支援することに特化した部門である。同様の施設は全国的にも数は少なく、一般的な障害者支援とは一線を画す。

利用者である未成年は皆、何らかの障碍を持ち併せていて、更生施設から出所した経験を持っている。若くして傷害や殺人未遂、窃盗や詐欺などを企ててしまい、補導や逮捕歴がある利用者の中には、幾度となく犯罪を繰り返す者もいる。彼らの社会復帰を目指すために「くらし」では、市内に2階建て一軒家を用意し、そこを支援拠点とした。南側には約20坪ほどの庭がある。敷地周辺には1メートルほどの高さの柵が張り巡らされているが、決して逃亡を阻止するための塀ではないため、見晴らしは良好だ。この建物は「三ツ屋（みつや）」（以下「三ツ屋」）と呼ばれている。

2. 三ツ屋における芸術表現活動「楽画会（らくがかい）」について

筆者は2016年秋より、触法障害児の学習及び社会復帰を目的とした支援に携わるようになった。支援プログラムを立案するために運営側から求められたことは、参加者が概ね16歳前後の男女、国籍も様々であるため、まずは言語活動を優先した国語と、その合間に絵を描くなどの表現活動を行ってほしいということであった。そこで筆者は、支援時間を区切ることなく彼らと共に過ごす場に、字や絵が描ける

スペースを設けて、2つの教科を同時に行いながら、「主体的な学び」につながるきっかけを模索することを申し出た。協議の結果「アート活動」という授業プログラムで支援を開始することになった。このプログラムは、自分の未来を楽しく描く会という意味を込めて「楽画会」と名付けた。

3. 楽画会の実施計画

- ①毎月2、3回程度開催し、活動支援時間は10時から16時。支援者は楽画会参加者として活動する。
- ②支援者は参加者に活動を強要せず、言語に頼らない関わりを持つ。
- ③間取りは1階に8畳のリビングキッチン、主となる6畳の活動部屋、8畳の和室、2階に6畳の和室が3部屋。1階活動部屋のテーブル(1800×1800)に白い厚紙を全面に敷き、10色のマジックペンを各5本ずつ置く。室内の照明は常に点灯しておく。昼食時の座席指定はなく、準備から後片付けまで各自で行う。麦茶は常時用意して自由に飲める。
- ④観察対象者：M（プログラム参加時16歳）男子 軽度知的障害（区分1） 数罪
- ⑤出展コンクール名：「第10回ぼくらのアート展」 2020年2月4日（火）～2月9日（日）
（主催：愛知県知的障害者福祉協会）
- ⑥観察期間：2018年8月より2020年8月まで。

Ⅳ 実践結果

2018年8月10日（快晴）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。職員が新人のMとR（女子）を連れてきて合計5名で楽画会を開始する。Mは顔が赤く、熱がある。奥の和室で午前中休憩するように筆者が指示を出す。Mはあまり反応がない。保健士が来て診察をするが、緊急性はないとの判断で様子を見ることになった。

14時に理事長が視察に来て、Mのこれからの対応について打ち合わせをした。Mは重度の若年性糖尿病で止めどなく食べてしまう傾向があり、厳しい食事制限があるらしい。昼食もとらずMは一日中横になっていた。15時45分に楽画会を終了する。

8月24日（快晴）台風一過・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。11時にMが職員に連れられてきたが、またもや高熱のため和室に寝かせた。昼食時に様態が芳しくないMをグループホームの責任者が迎えに来た。

9月14日（曇り）・・・筆者は9時45分に三ツ屋へ到着。Mは2日前に公共施設の自動ドアを蹴り壊したため、留置場に入っているらしい。Mは怒りのスイッチが入ると大暴れするらしく、それを阻止するために9月から強靱な身体を持つ職員J（南米国籍男性）が監視に入る。

10月12日（快晴）・・・筆者は9時50分に三ツ屋へ到着。職員IがMら4名の参加者を連れてきた。職員Jが5分後に到着。Mは筆者と職員Iに積極的に話しかけてきた。Mが、着ているジャンパーに施されている刺繍柄を画用紙に描いてほしいと筆者に申し出た。筆者は輪郭線だけを描く。そののち、Mは過去の武勇伝を話し始めた。それを聞きながら筆者は、「イライラして人を殴りたくなる時、じっと我慢できる男はカッコいいと思いますよ」と伝えた。昼食後、職員IとMは徒歩5分ほど離れたところにある施設へ出かけた。30分ほどして三ツ屋に戻り、特に何かすることもなく15時15分に楽画会を終了した。

Mによると、図画工作や音楽などの表現活動には全く興味がなく、やったことがないらしい。

10月19日（快晴）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。職員Jが玄関で皆の到着を待っている。主任職

員がMら4名を連れてくる。Mが先週着ていたジャンパーは、楽画会前日に量販店で盗んだものだった。Mより少し前から楽画会に参加するようになったS（男子）と一緒に遊びに行き、Sにそそのかされて盗んだという。今週水曜日にMが職員へ自首し、お店に出向き謝罪と支払いをしてきたようだ。Mには現在保護観察がついているため、観察員が怒っていることに恐怖を感じたMは、少年院に送られることを心配して小刻みに体が震えている。11時ごろから元気を取り戻したMは、1階に降りて他の参加者と雑談をするようになった。午後になると、SとMが腕にタトゥーのような絵を描いてほしいと筆者に申し出てきた。15時30分に楽画会を終了した。

11月9日（雨）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。Mら4名と職員2名で楽画会を開始。リビングの電球が切れていたため、Mに職員Jと一緒に近くの電気屋へ買いに行ってもらったが、径の違う電球を5つも買ってくる。理由を尋ねると、これしかなく、17mm径は高かったからと答えた。高くてもいいから指示したものを買ってくるよう伝える。14時30分に指示通りの電球を買ってきた。

楽画会終了間際、「近頃背中が痛い時がある」と筆者がMに言うと、おもむろにMは筆者の背後へ回り込み、後ろから担ぎ上げ背骨矯正を2度やってくれた。15時45分に楽画会を終了する。

Mは都合のいいように取り繕う言動や、妄想を事実のように話す時がある。今日、職員Jは買うものを間違えているMを見守った。結果的にはかなり時間を要したが、Mには最善の対応だろう。

11月16日（快晴）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着するが誰もいない。10時10分に職員IがM、Rら5名を連れてくる。楽画会を始める前からMがRの近くにぴったり寄り添っている。そして時折Mが筆者の体を触ってくる。Mが昼食時に「来週審判が出るけど、おれは少年院に行くのかなあ」と筆者に聞いてきた。ジャンパー窃盗の結審である。筆者は「自首したことはあなたの成長です」とだけ答えた。かなり心配している様子だが、数分経過するとケロッとしていた。14時になりMとRが今日も何か描いてほしいと言い、筆者は腕にアニメのキャラクターを描いた。15時30分に楽画会を終了。

2019年1月18日（快晴）・・・筆者は9時45分に三ツ屋へ到着。落ち葉の溜まっている入り口を掃除し、郵便物をチェックしていると、新人職員がM、Rら、4名を連れてきた。昨日Mがグループホームで暴れたらしい。Mは午前中、筆者と話をすることもなくぶらぶらしていた。11時30分になり米を炊き、昼食の準備を始める。12時15分に昼食をとる。午後になると筆者は、Mの腕にアニメのキャラクター、Rの腕に黒猫とハートを描く。40分ほどで描き終わると、職員がMに薬を飲ませた。すると椅子を並べて横になり、いびきをかき始めた。そのまま15時45分まで寝続けたMを起こし、楽画会を終了した。



記録画像1 1/18pm

2月22日（快晴）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。10時15分になるとM、Rら4名がやってきた。Rは体調不良のため和室で横になる。Mは何やら落ち着かない様子で貧乏ゆすりがひどい。11時45分にカキフライ弁当が配達され、12時にみんなで食べる。職員や筆者の目を盗んで、Mが他の参加者のカキフライを食べてしまう。そしてRの昼食のため準備しておいたスティックパンも、すべて食べてしまった。職員がMを叱るが全く聞いている様子はなく、貧乏ゆすりがひどくなっていく。Mからの要望で左腕にアニメの主人公を描いた。15時に体調が悪化したRを早退させたのち、15時50分に楽画会を終了した。

4月19日（曇り）・・・筆者は9時45分に三ツ屋へ到着すると、すでに職員IがMら5名と活動をしている。さっそく部屋に入ると、Mの目つきがおかしい。そのまま筆者は見ても見ぬふりをして準備

をした。10時になると、本部の職員が楽画会に参加させるために6名の利用者を連れてきた。その後、次々と職員がやってきて三ツ屋は大賑わいとなった。2階の3部屋が様変わりしている。一番奥に今まで制作したすべての絵が保管されていて、真ん中がMの部屋、手前がRの部屋になっていた。大勢が様々な活動をしているため、いつもの楽画会参加者は戸惑っている。今日は弁当が配達されないため、職員IとMは昼食の準備を10時30分より始めた。Mは野菜を切ったり、味噌汁を作る手伝いをしたりと調理を楽しんだ。Mはダイエットのため昼食をとらなかった。しかし、朝食にラーメンを2人前ほど作って食べたらしく、あまりお腹が空いていないのだと筆者にだけこっそり教えてくれた。

午後、久しぶりに職員Jが三ツ屋に来てくれた。そして14時より、MとRを別の施設で作った食材を関連施設へ配達に連れて行こうとした。するとMが強く拒絶する。Rがなだめると満面の笑みで出発していった。

8月2日（快晴）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。暑すぎてクーラーが効かない。Mら6名、職員3名で楽画会開始。開始早々、誤嚥により参加者（女子）が苦しんだ。Mが背中をさすりながら午前中看病をした。昼食後Mは職員Jと配達に行く。

8月9日（快晴）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。Mら6名、職員2名で楽画会を開始する。今週ナイジェリア人の参加者N（男子）がタオルで職員の首を絞めたらしく、MがNを強く叱っている。10分ほど説教が続き、あまりにきつい叱りであったため元利用者の職員がMを抱きしめて背中を軽く叩いただけの仲裁に入った。午前中文句を言い続けていたMは11時30分に昼食をとり、疲れたのか12時から2階の居間で寝てしまった。14時になり起きてきたMが左腕に龍の絵を描いてほしいと筆者に申し出たため、30分ほどで描いた。15時にMは職員Jと配達に出た。16時に楽画会を終了する。

最近のMは正義感の強さが鮮明に表れてきた。そして人にやさしくする態度を恥ずかしがらずに出せるようになった。だからNの行動を到底許すことができなかったのだろう。しかし、興奮状態が続き感情的にNを罵るばかりで話の終わり方がわからなくなってしまったMは、言葉に頼りすぎて自らパニックに陥ってしまったようだ。

8月23日（雨）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。Mら6名、職員Iで楽画会を開始する。午前中Mは特に何もせずに過ごした。昼食後、女性参加者と恋愛の話をしていた。女性参加者が「今好きな人はいない。死んだ両親からひどく虐待を受けたから人が怖い」と少し怒った表情で理由を言う。それを聞いたMは女性の背中をさすりながら、「俺が味方だから心配しないで」と彼女を気遣う言葉をかけていた。Mは配達に行かずに一日中女性に寄り添った。16時に楽画会を終了する。

9月13日（曇り）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。長い服役を終え出所してきたベテラン参加者Y（制作を得意とする男子）が楽画会に再参加。Mと共に「あいちアール・ブリュット展」を見学したいと筆者に要望してきた。さっそく本部の許可を得て、参加者6名全員で昼前に出発する。市民ギャラリーで展覧会を見る。展示してある作品を見てMは「なんかいいなあ」「絵が描けるやつはうらやましいわ」とつぶやいていた。

14時30分に三ツ屋へ帰る。Mら参加者3名が職員Iと1時間ほどピンポンで卓球をした。16時になり楽画会を終了する。

9月20日（快晴のち雨）・・・筆者は10時10分に三ツ屋へ到着。Mら5名が元気よく笑顔で出迎えてくれる。Mは一日中参加者の身の回りの世話をし15時15分に配達へ出かけた。

Mの職員のような振る舞いが楽画会以外の活動でも目立つようになってきたらしい。職員たちが冗談で「M職員」と呼ぶと利用者からクレームが出るようだ。

10月4日（快晴）・・・前日、理事長より三ツ屋での活動成果を報告してほしいと電話で依頼された。

筆者は10時に三ツ屋へ到着。職員3名がMら7名を連れてくる。情緒が不安定でたまに泣き出す女子参加者をMが昼まで見守った。弁当を食べ終えると、Mが男子参加者と柔道ごっこをして遊びだした。Mが寝技に持ち込もうと倒してのしかかると、相手が動かなくなってしまう。慌てたMがリビングにいた筆者を呼び、筆者はすぐに救急車を呼んだ。搬送された後、状況を聞いている職員Jに、横で見ていた男子が「関わり合いたくないから見て見ぬふりをした、迷惑だ」と訴えていた。その後、へらへらした表情でその時の様子を説明するMに、職員Jが「人にけがをさせたのだから反省しろ」ときつく叱った。

13時45分、職員Iが中年の体格のいい利用者（男性）を三ツ屋へ連れてきた。筆者はただならぬ目つきをしたこの男性に警戒をした。職員IがMに男性と腕相撲をしてみたらどうかと促した。あっという間にMは負けてしまい苦笑いをする。すると、いきなり男性が右足のかかとでMの太ももを蹴った。鈍い音がして驚いた筆者は慌てて仲裁に入る。しかし、瞬く間に激しい蹴りやパンチの応酬に発展してしまう。筆者だけでは止めることができなくなり、近くにいる職員にも応援を求めた。その時、男性のパンチがMののどに当たり、Mの目つきが完全に変わった。男性の背後に回り、首を力いっぱい締め上げると、みるみるうちに男性の顔が赤くなり危険な状態になる。職員JがMの首を締めて2人を引き離した。筆者は男性の背中をさすり、しばらく椅子に座らせた。すると、「仲直りがしたいから謝らせてほしい」と男性から申し出があり、筆者は外にいたMと職員Jのところに向かった。かなり興奮しているMの背中をさすっていると、次第に落ち着きを取り戻す。男性が仲直りをしたいと言っていることをMに伝えると「わかった、すぐ行く」と返事をした。リビングでは驚いた女子が過呼吸になり痙攣している。利用者と職員に看病を任せて、Mと男性が和解する場の真ん中に筆者は立った。Mが、「先ほどはすみません、先輩に向かって首を絞めてごめんなさい」と謝った。男性も、「おとなげなく叩いてごめん、つい無意識に急所を攻撃してしまった」と反省の弁を述べた。すぐにMを和室に移動させ、過呼吸になった女子を見に行った。Mも一緒についてきて様子を見ている。Mは右手薬指と、左手甲を擦傷している。15時になると昼に病院へ搬送された男子が、問題ないとのことで三ツ屋に戻ってきた。落ち着いた参加者から各々解散をして17時に戸締りをした。

今日はいろんなことがありすぎた。柔道ごっこのことは想定内としても、職員Iがなぜ男性を連れてきたのか謎である。男性の目つきを見れば、安定した精神ではないことはすぐにわかる。ましてや、10代の男子の前に上半身の刺青が見え隠れする年上の危険な雰囲気が漂う男性を立たせれば、警戒しなければならなくなるのは当然だ。

10月11日（曇り）台風19号到来・・・筆者は9時50分に三ツ屋へ到着。MやYら7名が明るく迎えてくれて、ハグで無言のあいさつをする。新人T（男子）が参加する。職員3名が担当。Tはかなり礼儀正しく、初対面の筆者に対して積極的に話しかけてくる。さっそくミサンガを作り筆者にプレゼントしてくれた。Yは以前服役中に描いていた幾何学模様の絵をたくさん見せてくれた。そして筆者に作品を保管してほしいと申し出た。職員Iから、Tの対応について注意事項を聞く。Mは参加者一人ひとりに声を掛け、お茶を配っていた。昼食後、女子参加者の具合が悪くなり、しばらくMが和室で看病していた。女子が寝たのを確認して、MはYと職員を誘いコンビニエンスストアへ出かけた。Yが筆者に缶コーヒーを買ってプレゼントしてくれる。Tは一日中ミサンガを作り、職員全員の金運を願いながら手首に巻きつけていた。14時15分に法人幹部の女性が三ツ屋の様子を見にきた。「明るい雰囲気で行き活動できるのはMのおかげだ」とMをねぎらった。14時30分にな

るとTがみんなのために専用の器具を使って珈琲を淹れてくれた。即座にMが近くのコンビニエンスストアへお菓子を買いに行き、優雅なおやつとなる。15時30分に全員で後片付けを行い16時に解散する。

Tのサービス精神あふれる活動がMを刺激したのか、今日のMはいつも以上に参加者の様子を気遣う場面が多く見受けられた。

11月8日（快晴）・・・筆者は11時に三ツ屋へ到着。M、Tら9名と職員2名で楽画会を開始する。今日は参加者に落ち着きがなく、Mだけが冷静に職員のような動きでみんなをサポートしながら、特にそわそわしている男子陣を頻繁に散歩へ誘い出していた。11時頃、Tが図形を描き始めて一気に50枚仕上げた。それをなぜかMが添削している。昼食を全員でとったのち、筆者は13時から30分間、コンビニエンスストアの喫煙所の掃除に出かけた。三ツ屋へ戻り、相変わらず落ち着かない参加者全員の肩や掌をマッサージした。するとMが手伝ってくれる。14時40分になるとTとMが珈琲を淹れてくれる。15時になるとTが自分の携帯電話がないと言い出す。全員で手分けをして探すが見つからず、コンビニエンスストアへ探しに行こうとすると、Tが胸ポケットの中に入っていたことを大声で職員に伝えた。しかしそれは他の参加者の物で、たちまちTと大喧嘩になる。Mが仲裁に入るが、盗んだと疑われたTは不機嫌になり「もう二度と三ツ屋には来ない」と言って帰ってしまった。せっかく淹れた珈琲を誰も飲むことなく、15時30分に流れ解散とした。

Mがリーダーシップを発揮して、三ツ屋の環境を丁寧に維持しようとしている。しかし、大人数の活動は言葉で交流する場面が多くなり、意思疎通がうまくいかないようだ。相変わらずMの職員のような動きに反発する参加者は多い。

11月15日（快晴）・・・事故渋滞に遭遇した筆者は、10時15分に三ツ屋へ到着する。MやTら8名がすでに活動している。Yが愛知県知的障害者福祉協会の主催する「ぼくらのアート展」のチラシを筆者に見せにきた。グループホームの職員から開催を教えられたようだ。筆者は書類を預かり、本部へ出品の許可を取る。愛知県豊川市で開催されるこのアート展にMが興味を持った。故郷だからだ。そして展覧会がある場合は、自分が利用者全員を連れてツアーコンダクターをやると言い、昼食をはさんで14時30分までツアープランを考えていた。その後Tとコーヒータムの準備を始める。今日はミルクティーを作ってくれた。15時40分に楽画会を終了。帰り際にMが、「来週、アート展に出す絵を描く。(自分の)お姉ちゃんに絵を描いて、豊川で展示してもらえば、見に来てくれるから」と筆者に告げた。「本当に描きたいと思ったら描いてよ」と答え、「わかつとる、無理しないよ」と言い、ニコニコしながら三ツ屋をあとにした。

Mが故郷での生活を振り返れば、決していい思い出ではないはずだ。しかし、それを上書きするようにMの故郷でのアート展開催は、彼に制作意欲をもたらしただけだ。

11月22日（雨のち曇り）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。参加者8名、職員2名で楽画会を開始する。部屋に入るとMが筆者の股間をいきなり叩き、筆者は床に倒れた。ごめんねと何度も謝ってきたが、しばらく筆者はうずくまっていたため、「救急車を呼ぼうか」と聞いてきた。落ち着いた筆者はMに「いきなり力任せに叩かないでください」と苛立ちながら話すと、しばらく無言で筆者の横で座っていた。30分ほど経過してMは和室に移動すると、すぐに寝てしまった。11時15分に起きると「お腹が空いたから弁当食べるわ」と言い出した。筆者は「少し早いから5分待ちましょう」と提案すると、散歩に出かけていった。12時になり昼食をとろうとすると、ちょうどMが帰ってきた。昼食の直前にTがリビングの椅子に座っていると、MがいきなりTの股間を叩いた。びっくりしたTは膝で机を蹴飛ばしてしまい、横で夢中に絵を描いていた男子の前に置いてあったお茶がひっく

り返ってしまった。Tは怒り、「てめー、ぶっ殺すぞ」と罵ると、Mの表情が一転して怯え出した。筆者はすかさずMに、「とにかくみんなに謝って、そしてタオルを持ってきて拭いてください」と言うと、あわてて風呂場にタオルを取りに行った。Tは相当痛かったらしく、しばらく横になっていた。2人を離して昼食をとるようにした。

午後からは各々落ち着いて活動をしている。Mは職員Jと一緒にゲームをしている。14時になりMがみんなのために珈琲を淹れてくれた。15時になり後片付けをして15時30分に解散する。

12月6日（晴れのち曇り）・・・事故渋滞により筆者は10時15分に三ツ屋へ到着。主任職員を中心に参加者全員で会議をしている。参加者7名、職員は3名。Mが筆者に、今後珈琲を淹れたら材料代と手間代が欲しいと申し出た。そこで筆者は、「1日500円を私が支払うので、みんなに提供してください」と伝え、主任職員の立ち会いでMに支払った。その直後からMはコーヒーマーカーの掃除を始める。11時55分にランチタイム。昼食後13時より午後の活動を再開した。アート展に出品する作品制作のため、画用紙とマジックペンを準備したMは、線と点によるデザイン画を描き始めた。1時間ほど集中して描き上げた。筆者は他の参加者4名の制作状況も見て、出品計画を本部に申請した。14時になるとMが珈琲を淹れてくれた。そして15時に食器やコーヒーマーカーをMがひとりで洗い、15時30分にみんなで後片付けをして解散する。

今日は全体的に大変安定した活動であった。Mが初めて絵を描こうと意欲的になったことは喜ばしいことで、目つきが優しくなる。急に他の参加者がMを慕うようになった。

2020年1月10日（快晴）・・・事故渋滞により筆者は10時10分に三ツ屋へ到着。Mが筆者を和室へ連れていき、Tが年末に無賃乗車で逮捕されたことを伝えてきた。Mら7名、職員2名で楽画会を開始する。Mはすぐに珈琲を淹れる準備を始めた。10時にMが珈琲を全員に提供して、昼食前に食器を洗い、昼食の準備を始めた。昼食後、和室から突然激しい物音がした。職員Jが東南アジア籍の男子を押さえつけている。Mが仲裁に入り男子の背中を必死にさすっていた。30分ほどかけて徐々に落ち着きを取り戻した男子は、付き添ったMと共に和室で寝てしまった。楽画会は15時に終了した。

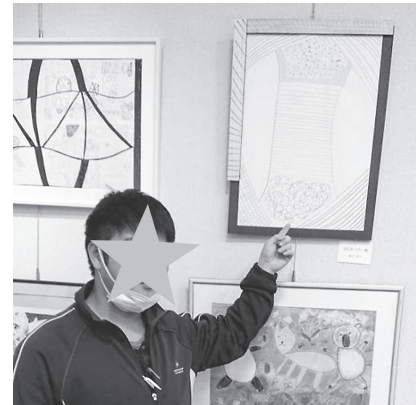
今回の騒動で驚いたことは、仲裁に入ったMが何も言わず男子の背中をさすっていたことだ。筆者や職員の今までの対応を真似したのだろうか。

1月17日（曇り）・・・筆者は10時から法人本部で、理事長に今までの三ツ屋の活動経緯と、アート展に出品する作品の解説をする。11時15分に三ツ屋へ移動。待ちくたびれたとMら8名が出迎えてくれた。職員は3名。カレーのにおいがする。Mは職員と昼食の準備をして、他の参加者は各々制作をしている。12時にカレーライスとサラダ、味噌汁が完成したためランチタイムとした。午後の活動を再開してしばらくすると、大阪の収監先で朝に出所したTが職員に連れられて帰ってきた。Tは収監中に猛省したらしく、三ツ屋に到着すると泣き出した。Mがカレーうどんを作り、2階の個室で食べさせていた。食べ終えた頃に筆者がTの様子を見にいくと、少し顔を引きつらせながら、「みんなに迷惑をかけてすみません。ごめんなさい」と謝ってきた。筆者は黙ってうなずいた。するとTはポケットから香水を4つ出して、Mや筆者に嗅がせてくれた。

15時10分に付き添っていたMから「Tが窓の外を見ながら『誰かが俺を見張っている。怖い怖い』と言いながらずっと泣いている」と報告があった。16時15分に解散する。

1月24日（快晴）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。参加者8名、職員2名で楽画会を開始。さっそくMが珈琲を淹れる準備を始めた。筆者は2階でアート展に出品するための準備を行う。Mは1日中珈琲を淹れ続けて、参加者に振る舞っていた。16時に楽画会終了。2月3日にMら3名の作品3点を出品する。

2月7日(晴れ)・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。参加者はM、Tら7名。Yがいない。職員によると、アート展を見に行った2月4日以降、なぜか突然Yは逃亡してしまったらしい。職員が筆者にアート展の展示風景を写真と動画で見せてくれた。Yの作品の横に黄色い紙が貼ってある。筆者は本部に問い合わせると、「2月4日の午前中に主催者から、アート展の大賞に選ばれたと連絡がありました」と声高らかに報告してくれた。10時前からMは珈琲を淹れる準備をしていた。Mは珈琲の準備をする合間に幾何学模様の絵を描いている。そしてアート展に出品して賞を獲得するためにはどうしたらいいかと筆者に聞いてきた。筆者は賞を獲得することよりも、描こうという気持ちになること、そしてペンを持つことの方が大切だと伝えた。11時45分に昼食をとる。午後も珈琲を淹れながらMはカラフルな幾何学模様を描いていた。



記録画像2
初制作を出品するM

Mの意欲的な発言に筆者は大変驚いた。受賞の祝福を受けるYが羨ましかったようだ。それにしても突然いなくなったYが気がかりである。

Mは近頃、珈琲を淹れることを自分の仕事としている。きちんと規則正しく作業をすることが定着しつつあるMの次なる目標は、社会の中の自分の立ち位置を確立することなのだろうか。

2月14日(曇り時々雨)・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。今日にもぎやかな声が聞こえてくる。今日の参加者はMやT、Yら9名、職員は4名。楽画会開始と同時に理事長がやってきて、Yが不在の中、大賞受賞を祝った。Mがすでに珈琲を淹れて全員に提供している。理事長は活動をしている一人ひとりに激励をして、11時まで三ツ屋に滞在した。

楽画会が始まってから男子参加者が筆者に「コーラ飲みたい、先生おやつは」と頻繁に聞いてくる。11時30分頃、リビングで筆者の隣にいたMが「コーラはだめ、さっき珈琲を飲んだでしょ」と少し強い口調で言うと、「なんだこのやろー、ごちゃごちゃうるせーぞ」とMに反発した。するとMが突然立ち上がり、男子の首を締め上げた。圧倒的なパワーにたちまち男子は意識朦朧となり、2人とも倒れ込んでしまった。近くにいたTや筆者が止めに入り、直後に職員JがMの首を踏み仲裁に入る。Mはあっという間に目を白黒させて気絶した。腕が離れて自由になった男子はMの股間を目がけて蹴ろうとしたが、別の男子が後ろに引きずり出したため当たることはなかった。大声でMに罵声を浴びせる男子を、職員が2階へ連れて行く。意識が戻ったMはしばらく放心状態ではあったが、職員Jから「(男子の)病状をおまえは知っているのだから、もう少し大人になれ」と注意をされた。納得していないMを筆者は抱きかかえ、隣の和室へ移動した。Tらも一緒についてきて、みんなでMの背中をさすった。「コーラが飲みたいと何度も言ってくるのは、今言ったことをすぐ忘れてしまうという病気なのだから、優しく聞いてあげてください」と筆者はMにお願いをして、「同じことを何度も言われて腹が立ったら、一度返事をしないようにしてみればどうですか」と加えてアドバイスをした。そしてMや心配して集まってきた男子らと一緒に和室で横になった。15時過ぎに楽画会終了。

2月21日(快晴)・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。参加者はMやTら10名と職員3名。Mは珈琲をすでに作って振る舞っていた。各々活動をしていて極めて環境は良い。少し早いのが11時40分に昼食の準備を始めて45分からランチタイムとした。午後も活発な活動をしていた。Mは8回珈琲を淹れ続け、その都度器具を掃除して丁寧な作業をしていた。

3月6日（快晴）・・・筆者は9時45分に三ツ屋へ到着。三ツ屋の活動体制が変わった。Tとコーラをせがむ男子が部署移動をした。今日の参加者はMら7名で職員は2名。Mはいつものように珈琲を淹れている。Mは2回珈琲を振る舞うと、おもちゃの袋詰めの内職を始めた。12時になり昼食。Mだけ12時15分まで内職をしてから食べ始めた。13時になり全員活動を再開する。職員JがMら3名を連れて13時30分より近くの公園へ行った。14時に戻り、それからMは再び内職をする。15時15分に後片付けをして、終礼ののち解散。

3月13日（曇り）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。Mが筆者の車まで駆け寄ってきて迎えてくれる。少しやせている。職員によるとMは毎日筋トレと1時間の散歩を行っているらしい。今日の参加者はMら8名、職員4名。Mは午前中2回、午後2回珈琲を淹れながら、合間に参加者の身の回りの世話をしていた。13時より職員JがMらを連れて配達に出かけた。

3月19日（晴れのち曇り）・・・筆者は10時に三ツ屋へ到着。Mら7名、職員3名。Mは9時から珈琲を淹れているらしい。新人参加者（女子）の状態が不安定だったため、Mが一日中付き添った。

8月8日（快晴）・・・筆者は9時45分に三ツ屋へ到着。昨日より法人本部がレストランを新規開店し、Mら数名の男子が働き始めたらしい。

* Mは2020年12月1日時点、ウェイターとしてレストランで働いている。お客様やスタッフへの気配りも欠かすことなく、進んで皿洗いもして、安定した収入が得られているようだ。

V 活動考察

1. 楽画会が継続できる条件

楽画会を継続するための条件は2点である。①支援者は参加者の「表現するために文具等を手に取ろうと思う気持ち」を大切に、特に言葉によるファースト・アプローチは極力行わず、そのかわり支援者が自発的な遊びに熱中する姿を見せること。②生活面でトラブルが生じた時、言葉だけで解決するのではなく、必ず背中をさする、手を握るなどのスキンシップを伴って行うこと。本実践ではこの条件を確実に理解し実行できる職員の協力があり、参加者の安定した活動環境が確立されている。

2. 主体的活動の芽生え

社会のルールから逸脱してしまった触法障がい児は、総じて指導者を含めた大人から指示されることを極端に嫌う傾向が見受けられる。それならば、思うがまま自由に生きなさいと提案しても「じゃあどうすりゃいいんだ」と指南を求める。そこで愛情たっぷりの言葉で接しようとするれば「うっとうしい」と拒絶する。彼らとのコミュニケーション確立における中庸は限りなく狭い。

そこで本実践において主体的活動の芽生えとなったきっかけは2つある。①楽画会は生活全般を芸術表現活動としてとらえ、参加者に活動の制限を設けなかった。これにより、何かを作らなければいけないという意識が薄まり、快適な生活を模索することだけが浮き彫りとなった。そして複数の参加者同士が協働生活の中でバランスのいい生活環境を保つ努力が芽生えた。②その環境で見えたわずかな生活態度の変化を支援者が見逃さなかった。そしてその変化を過度にもてはやさないことで表現意欲が芽生えた。彼らの主体的活動を薄氷の上にあるコミュニティの中で表出できれば、それは「完全な主体性」と言え、本実践の目的に直結する。

3. Mの態度の変化

Mは楽画会に参加し始めた時、体調がすぐれず、些細なことですぐ怒っていた。しかし支援者が頭ごなしに言葉で叱ることをせず、スキンシップを中心にMの話を聞くことに徹したため、平常心を保てる時間が多くなっていった。すると、他者への関心が高まり、支援者と同じような態度をするようになっていった。いつしか他者の主体的な活動があらぬ方向へ暴発しそうになると、自らが盾となり食い止めようとしていた。そして家族への想いを絵画制作という形で表すことができた。社会とつながる絵画コンクールに自分の存在を示すことができたのは、生活が安定して他者との信頼関係が確立し、自己肯定感を得たからだろう。そして最後に言葉に頼らない交流が見られたことは大きな実りと言える。

4. 周囲のMへの対応の変化

職員Jは一貫して最低限の言葉のみで関わった。そして三ツ屋から配達に連れ出し、社会と触れる機会を作る。他の職員も、Mの成長が見られる行動をあまり褒めることはせず、常に見守っていた。楽画会に慣れて、次第に職員の真似ごとをするようになったMを参加者たちは嫌ったが、自発的な絵画制作をした直後から、Mを頼り慕うようになっていく。すると、Mの言葉数が激減し、活発な行動力だけが際立った。そしてMの態度の変化を理事長だけが丁寧に褒めた。また筆者は、今までMに対して敬語を崩したことはない。

Ⅵ 結論—楽画会の喜びと不安—

楽画会では以下の条件が重視されている。

- ①意欲が湧かなければ無理をして活動する必要はなく、いつでも休憩ができる。
- ②言葉を駆使した支援をしないかわりに支援者も参加者として活動をする。
- ③スキンシップが頻繁に行われる。

本実践の目的は、子どもの主体性を引き出す前に大人が理解すべきことは何かを見つけることで、それが明確でないことを広範的な教育環境の問題意識とした。結論は、楽画会でこれらの条件がすべて揃ったために、Mの主体的活動が見られた、ということである。しかし、支援者がこの環境に慣れて条件を軽視してしまえば、また振り出しに戻る。それだけ楽画会の活動環境はもろいと言える。このバランスを保つことは芸術支援活動の生命線なのである。

触法障碍児の多くは愛着障碍であり、生物学的に見て、多幸感を得るホルモンとされるオキシトシンが不足している彼らに、スキンシップを介した無条件の愛情は心に安らぎをもたらすと言われている¹²。とは言え、いきなり我々は彼らからの交流を受け入れることはできないだろう。しかし勇気をもって少しずつ接することで、この先彼らの主体性が見受けられる喜びが得られるかもしれない。通常教育環境ではこのような対応は現実的ではないだろうが、楽画会の活動条件を広く展開する挑戦をしてみてもいいのではないか。

おわりに

楽画会の参加者は一見すると普通の少年・少女だ。一人ひとりと対峙し、じっくりと関わらなければ彼らの本当の姿を知ることはできず、また支援の道筋は見えてこない。

認知能力の可視化の重要性は、現在の教育環境においてかなり早い段階から浮き彫りとなっている。

そのような中で、OECDは非認知能力（＝社会情動的スキル）の重要性について研究を加速している。数値化しにくい非認知能力を育むことはその人の人生を長い目で見た時、あとでジワジワ効いてくる「あと伸びする力」を養うことだと言われている¹³。彼らが自分の能力の弱さを実感し、そこから犯罪につながる行為に発展してしまった時、自分では解決できそうもない無力感を痛感してしまうだろう。何とか覆水を盆に返すために支援者がすべきことは、本来就学前に行うのが望ましいとされる非認知能力を育む努力なのではないだろうか。年齢相応の運動・認知・言語発達を形成するはずのところ未だ発達していない彼らは、身体的には問題ない場合が多く、そのバランスが不均衡で健常者と見紛うあまり、支援者はつい健常者と同様の対応に陥ってしまう。具体的に言えば、言語による説明を優先して、彼らの理解する機会と時間を根こそぎ奪ってしまう恐れがある。

いくら支援者がコミュニケーションを確立しようと様々な言葉がけを試みたとしても、支援者の思い通りにはいかないだろう。障碍児とのやりとりの質を問題視する際、子どものセルフ・コントロール、自己調整の場は不可欠とした上で、さらにコミュニケーションが成立しない場面でも行動の自己調整は行われているため、支援者は適切な自己調整が行える課題設定（環境も含む）を示すことで、子どもの行動の自己調整の発達を促すコミュニケーションは成立すると言われている¹⁴。非認知能力を育む課題提示を行おうと障碍児と向き合った時、言語に頼らない自己調整が行える余白を示すためには、“じっくり個々を見守りながら待つ”こと以外の選択肢はない。学力格差を幼い頃より痛感させられ、主体的意思表現が何かを理解することすらできなかった彼らは、いわば大人が作り上げた教育環境の最終的な犠牲者である。

「2020年度新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金」による成果報告



記録画像3
主体的活動の表出

- ¹ 近年告示された幼稚園から高等学校までの学習指導要領（幼稚園教育の基本・図画工作・美術科）の総則に明示してある。
- ² 戸田雅美ほか『保育学講座3 保育のいとなみ—子どもの理解と内容・方法—』日本保育学会編 東京大学出版会 2016年 pp. 65-67
- ³ 文部科学省『幼稚園教育要領』2008年 p. 23
- ⁴ <https://marketing-rc.com/report/report-eigokyoiku-20141127.html> 2020年10月18日閲覧
- ⁵ 田中敬一「早期英語教育に関する学生の意識調査—幼児保育学科学生に対する質問紙調査結果より—」『八戸学院短期大学研究紀要』八戸学院短期大学2014年 第39巻 pp. 25-34
- ⁶ 松家鮎美「幼稚園英語教育についての一調査—教育効果に及ぼすネイティブ講師の指導と担任のサポート—」『岐阜女子大学紀要』岐阜女子大学2019年 第48巻 pp. 37-43
- ⁷ https://biz-journal.jp/2018/09/post_24642.html 2020年9月2日閲覧
- ⁸ 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』中央教育審議会2016年 p. 611
- ⁹ 武富博文、松見和樹『知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング』東洋館出版社2017年 pp. 48-51
- ¹⁰ 武富博文、松見和樹 同上書 pp. 48-51
- ¹¹ 鈴木有紀『教えない授業—美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方—』英治出版2019年 p. 216
- ¹² 岡田尊司『死に至る病—あなたを蝕む愛着障害の脅威—』光文社2019年 pp. 98-109
- ¹³ 大豆生田啓友、大豆生田千夏『非認知能力を育てるあそびのレシピ—0歳～5歳児のあと伸びする力を高める—』講談社2019年 pp. 11-12
- ¹⁴ 徳永豊『重度・重複障害児の対人相互交渉における共同注意—コミュニケーション行動の基盤について—』慶応義塾大学出版会2009年 pp. 14-15